六月九日

しづや　りふかふ

時刻もまさに夜明け前であった。

したため終えて筆を擱き、机上の端にあった高さ八寸ほどの木製の塔を手元に寄せる。無垢の桐から彫り上げたもので、中に文を入れられるよう作り、扉を附けてあった。その観音開きを開ける。

紙箋を丁寧に折り、入れた。天に至り届くならば幸いである。したためた辞は左のとおりであった。

清々しき寂寞の黎、よはけまへのごと、澄み明けくも
静まりたる哉。いやさ、さういふさへ、はや煩はし。
とてもかくても候。観を伝へる機会、既になし。衆人に知らしめる字句そもそも無為なる哉。言説も轉りと変はらじ。論盡せど儚く路傍の石。何もなし。すべては虚し。是大いなる龍の肯定也。釈迦牟尼いみじくも説ひて、我が弟子は死に瀕し、躬は苦しめども、心は苦しまず、とふ。さよあけさ哉、あさらけく哉、無為虚儚とふは虚しからず。

しばらくは放心状態であった。

気持ちは満ちていた。さざ波に光の粒を瞬かせる海のごとくに。自分もまたそこへ逝くのである。戯れに手折られた草のように。

静かに、幸せであれ。そう願う。永世の燦めきと、自由自在とを得て、無窮の青空のごとく、笑い、無辺に広く、崇高清爽であれ。君を悼み、君の至福を想い仰ぐ。